

# 西宮のインドボダイジュについて

坂 崎 信 之\*  
安 藤 萬喜男\*\*

\* 名誉会員

\*\* (財)京都園芸倶楽部

日本植物園協会誌  
第33号 1999年3月

## 西宮のインドボダイジュについて

坂崎 信之\*  
安藤 萬喜男\*\*

### A Note on *Ficus religiosa* in Nishinomiya

Nobuyuki Sakazaki\*  
Makio Ando\*\*

インドボダイジュは印度ではお釈迦様とその樹下で悟りを開いたという信仰の厚い樹である。東南アジアでは仏教寺院にこの大木があるのは珍しいことではない。樹冠が30m以上に広がっている。また、ヒンドゥー教でも聖木とされる。

インドボダイジュ（印度菩提樹）*Ficus religiosa* L. はパキスタン～ブータン、インドからインドシナ、タイにかけて分布するイチジクの仲間。その仲間は、関西ではイヌビワ、九州以南ではアコウ、ガジュマルなどがある。また、観葉植物として鉢植えになっている種類としては、インドゴムノキ（略してゴムノキ）やベンジャミンなどがある。また、シューベルトの歌曲にでてくるリンデンバウム（菩提樹）はヨーロッパ原産のシナノキ科 *Tilia platyphyllos* とされる。同じく、日本のお寺のボダイジュ *Tilia miqueliana* は中国の原産で古く我が国に伝えられたものである。寒さに耐え、京都の寺院にも多い。

大阪と神戸の間の鉄道は新幹線を含めて4種ある。その内、最も海岸に近いところを通るのが阪神電鉄である。大阪の梅田から乗ると、甲子園の少し手前に武庫川の鉄橋を渡る。その上に「武庫川駅」があり、この駅は少し変わっていて、鉄橋の一部がブラ

ットホームになっている。川の左岸に降りると尼崎側、右岸に降りると西宮市である。駅のすぐ西に兵庫医科大学があり、お目当てのインドボダイジュはそのキャンパス、3号館の南側にある。その南側には高架になった高速道路が走っている。



〔兵庫医科大学のインドボダイジュ〕  
新梢の成長が良く、年に3mぐらい伸びる。  
1998. 10. 16 兵庫医科大学

\* 名誉会員

\*\* (財)京都園芸倶楽部

その樹は注意してみると道路からよく見える。幹は主幹を立てて、7~8m位のところで頭をとばし、毎年横枝を切り縮め、街路樹風に整枝しているようだ。幹も灰色がかった明るい色だ。葉はやや心臟形で葉先が細くなっている。だから一見したところ、それはカロライナポプラを思わせる。近づいてみて「オヤ、変だ」ということになる。

枝の先端は3階に達しているから樹高は8~10mある。胸高直径は約25cmの太さである。毎年、切り縮められている故か、新しい先端の枝は力強く3m位も伸びている。葉も大きい。葉柄の長さ20cm、葉身の長さ29cm、巾19cmある立派なものだ。しかし、枝に果実が大きくなっているのは観察できなかった。

このインドボダイジュはネパールのカトマンズから来たものである。兵庫医科大学が国立トリブバン大学と援助を兼ねた医学研究の交流があった。その際、18年前の1981年に約10本の苗が到着したものの1本という。当時の実務に当たった学長や教授は既に退官され、あるいは亡くなられていて、当時の記録は曖昧である。

インドボダイジュは熱帯性の高木である。寒さには弱いから、日本では南西諸島の亜熱帯地域では戸外でよく生育する。九州の南端では暖かい海岸付近では栽培できる。しかし、それより北の地方では植物園などの温室に植えている。近畿地方で戸外に生育するとはまず考え難い。しかし現実に目の前に元氣よく生育しているのを見せつけられては、ただ感嘆し、頭を下げるしかない。



〔インドボダイジュの葉〕

先端が長く伸び、滴舌尖端（ドリップ・チップ）の形である。 1998. 10. 16 兵庫医科大学

そこで、うまく育っている原因を考えてみた。

① ローケーションが最適である。北と西は建物があって冬の寒い風を防いでくれる。建物は高く、コンクリートで冬でも光や熱を反射し、夜は建物からの輻射熱もある。東と南は開けていて日がよく当たる。しかも、東側は武庫川の堤防、南側は高速道路の高架によって強い風は和らげてくれる。しかも隣の大きなクスノキが守ってくれるというわけだ。植栽の位置を決定するのにこのスポットを選んだ人は只者でないことだけは確かである。道路から直接出入できる場所なのに、悪戯される心配が少ないというのにもくい。

② この樹が来たのはネパールのカトマンズという。ネパールは低地からヒマラヤの高峰まで高度差のある国だが、カトマンズは北緯28度位だから日本では奄美大島あたりである。標高は1300m位だからかなり涼しいところに違いない。残念ながら、私はまだ訪れたことがないから解らぬが、そこでインドボダイジュが育つには、冬季の気温はかなり厳しいだろうと推定する。そこに育っているとすると、その系統は寒さに耐える特性を持っている可能性がある。耐寒性も種の多様性の持つ特性の一つ、そういう意味では大切な樹である。是非大切に、増殖して、各地で植えてみて欲しいものである。動物と違って、挿し木や取り木でクローンを増やすのは簡単なのだから。

インドボダイジュが現地でどのように育っているかは、行ってみるのがもっとも早く確実である。しかし、哀しいかな！ すぐに行けないのが現実。そこで、調べてみると、インドボダイジュはヒマラヤでは標高1400m（時には1600m）までは栽培しているという。カトマンズは標高1300m位というから栽培可能な地域に入る。

熱帯植物の生育には最低気温が大きな要因となる。カトマンズ空港（1330m）での月平均の最低気温は12~1月で2.0~2.3℃とある<sup>(1)</sup>。日本の日最低気温の月別平年値の最低月を見ると、東京：0.5℃、大阪：2.2℃、福岡：2.3℃、位である。ということは、大阪や福岡での栽培は可能性が高い。特に市街地や暖かいスポットを選べば、育ちそうだということでもある。ハーディネス・ゾーン<sup>(2)</sup>でいえば、ゾーン9b

(ランタナ・ゾーン)に属する地域では試してみる価値は充分あるようだ。勿論、なるべく日当たりのよい、霜が当たりにくい場所を選ぶ。はじめの数年は、冬季には霜除けをしてやる位の手間は掛けねばならないだろう。大きくなってしまえば多少の霜には耐えるだろうし、葉が枯れても春には新芽が吹くことを期待して試して欲しい。

寒さに弱いはずのインドボダイジュが兵庫県の西宮にあるという話は、私にとって驚きであった。ひょっとしたら例の別の種類かもしれないと疑ったのである。「この種類は熱帯植物。関西では冬に枯れてしまうに違いない。」と考えて試して見もしなかったのである。既成概念に捉われるというのは、いわゆる専門家の弱点である。植物については素人であるはずの医学の専門家の実践力に教えられたのであった。

この報告作成には、兵庫医科大学 石原通雄氏より、お取りはからいと資料の提供を頂いた。ここにお礼申し上げたい。

## 参考資料

- (1) Dept.of Medicinal Plants, Nepal : Flora of Kathmandu Valley (1986)
- (2) 坂崎信之ほか：熱帯花木植栽事典 (1998)

## 要 約

1. インドボダイジュ *Ficus religiosa* L.が西宮市の兵庫医科大学キャンパスで生育している。
2. この個体はネパールのカトマンズから導入されたものである。
3. 生育状態は良好である。その理由を考察した。
4. 日本でのインドボダイジュの生育の可能性について考察した。
5. 特に、この系統は耐寒性に富むと考えられるので、ゾーン9bでの栽培を試みる価値がある。

**SUMMARY** : There is a plant of *Ficus religiosa* in the campus of Hyogo University of Medical Sciences at Nishinomiya, which was transplanted from Kathmandu, Nepal. Although the climate of Nishinomiya, Hyogo Prefecture, is not very suitable for the species to grow outside, it actually grows well, partly probably because the planting site partly surrounded by buildings and a big tree is good. Similarity in the climate of Kathmandu and southern Japan may be another reason. It is suggested to plant the species in the warm zone of Japan.